

えどがわくちめい
江戸川区の地名(1)

しし ぼね
鹿 骨

地名の由来

昔、常陸国(現茨城県)鹿島郡の鹿島大神が大和国(現奈良県)の春日社へ向かう途中に、大神の杖となってお供していた鹿が病気で倒れ、死にました。それを、この地の人が手厚く葬りました。そのときに築いた塚を鹿見塚といいます。「鹿骨」の地名は、この塚に由来すると言われています。塚は、今も鹿骨三丁目にある鹿見塚神社内に残っています。

鹿見塚はかつて7～8mに土盛りされた塚に、太い老松が植わっていました。その松が寿命尽きて倒れ、残りの松も伐り払われ、塚も掘り返されました。

昭和42年(1967)、鹿見塚神社に「鹿見塚」と刻んだ石碑が建てられ、鹿骨発祥の地の由来を今に伝えています。

鹿骨

鹿骨は古くから人が生活をしていた地域で、応永5年(1398)の『葛西御厨注文』では「鹿骨」「一色」「松本」の3地名が登場しています。また、鹿骨では多くの板碑が見つかり、

区内で二番目に古い正応3年(1290)9月の日銘をもった板碑も鹿骨で見つかりました。

花の町 鹿骨

俳人石田波郷(1913～69)の『江東歳時記』(1966)に冬の鹿骨の情景が描かれています。「鹿骨はごぞんじ花作りの村。畑に温床に一年中花の絶え間がないが、年の暮れも



鹿見塚神社



鹿見塚の石碑

ようやく近いこの頃、ハンの畔木の林立する間に、美しく畑をいろどっているのは葉牡丹だ。縮緬^{ちりめん}等のナゴヤ種、葉のちぢれない地ハボ(地の牡丹)の二種がある。地ハボは美しさに劣るが強い野趣がある。」

江戸川区の園芸花卉栽培は、江戸時代に東小松川村の大杉方面で菊栽培を始めたことに由来すると伝えられています。その後、付近の村々に広がってゆき、明治から大正にかけては瑞江^{みずえ}・鹿本^{しかもと}方面でも盛んになりました。

鹿骨では、新潟方面から取り寄せた苗で芍薬^{しゃくやく}や牡丹の栽培を始め、大正12年(1923)の震災を契機に野菜栽培から花卉に転換する農家が増えました。金盞花^{きんせんか}、桜草^{さくらそう}、矢車草^{やぐるま}などの草花を大八車^{だいはちぐるま}に積んで、埼玉・千葉から茨城あたりまで行商に出かけたそうです。

戦争中は一時的に野菜作りが中心になりましたが、戦後には回復し、朝顔をはじめとして鉢物の卸売りも増えてきました。東京の花暦で「春は鹿骨の花からはじまる」と言われたほどです。現在では、四季を通して苗ものを中心に年間80万近い出荷があり、作付面積も増えています。

入谷^{いりや}の「朝顔市」や浅草寺の「ほおずき市」などに大量に出荷され、夏の風物詩として話題になっています。年末から正月にかけては、シクラメンやポインセチアなどの花が彩りを添えています。



シクラメン



さまざまな花卉の栽培

江戸川区郷土資料室

〒132-0031 東京都江戸川区松島 1-38-1 グリーンパレス 3階
TEL : 03-5662-7176 (9:00~17:00)